

県内初 民間の重度障害児預かり

昭和町河東中島の小児科医院が、重い心身障害のため在宅でたん吸引や経管栄養などの医療ケアが必要な子ども(医療的ケア児)を一時的に預かるサービスを始めてから1年が過ぎた。民間施設では県内初のサービス。子どもから目を離せず疲弊する家族に休息の時間をもちたいし、利用者からは「子育てになくてはならない施設」との声が聞かれる。だが、子どもの受け入れには看護師ら専門性の高い人材が必要で人件費などが病院経営の大きな負担に。新生児医療の進歩によって、医療ケアが必要なながらも救える命は今後も増加していくとの見方があり、同様のサービスをどう提供していくかが課題だ。

気持ちが落ち着く

「障害児を受け入れる施設はあるのに、医療ケアが必要な子どもへのサービスはまだ足りない」。10日、昭和町の小児科医院「げんきキッズクリニック」が運営する施設「スマイル」で初めて開かれた利用者の家族同士の交流会。甲府市下鍛冶屋町の宮崎真弓さん(分)は、傍らの布団の上で寝ている長男・比呂くん(8)の胸に手を当て、涙ながらに語った。

利用者家族に休息の時間 高い専門性 苦しい運営

現場発

比呂くんは生後4カ月のとき、てんかんの一種の「ウェスト症候群」と診断された。日常的に胃ろうからの栄養注入やたん吸引が必要で、寝たきりのため、真弓さんら家族ともある。

だが、施設を運営する同クリニックの宮本直彦院長は「受け入れ体制を維持するのは経営的に厳しい」と明かす。施設側は利用者1人に対し看護師と保育士の2人でケアに当たるが、人件費に加え職員研修費などで「スマイル」単体での収支は赤字だという。

医療的ケア児らを世話している家族に休息をもちたい支援は「レスパイトケア」と呼ばれる。レスパイトケア施設

宮本院長によると、他県の将来的な増加予想



レスパイトケア施設「スマイル」で開かれた家族の交流会で、子育てについて語る宮崎真弓さん(中央奥)。手前で寝ているのは長男・比呂くん。昭和町河東中島

専門家による調査で人口1万人当たりの医療的ケア児は1・2人との推計があり、これに当てはめると山梨県内の医療的ケア児は100人程度とみられる。宮本院長は「医療の進歩で将来的に医療的ケア児は増えることが予想される。地域の受け皿づくりは重要な課題だ」と話す。

現在、県内で一時預かりをしているのは「スマイル」のほか、県立あけぼの医療福祉センター(韮崎市)と国立甲府病院(甲府市)の3施設のみ。宮本院長は「人材の確保や費用負担が、レスパイトケア施設の整備がなかなか進まない要因」との見方を示す。

県障害福祉課によると、県の障害福祉施策の方向性を示す「やまなし障害者プラン」に、医療的ケア児に関わる施策は、体系的に位置づけられていない。同課の担当者「医療と福祉をどうやって連携させていくかが課題。今後、障害福祉施策の中で医療的ケア児の支援を検討していきたい」と話した。

〈鈴木秀人〉

医療的ケア児

ズーム 障害や病気で人工呼吸器やたん吸引、経管栄養などの医療ケアを生活の中で日常的に必要としている19歳以下の子ども。厚生労働省の実態調査(中間報告)によると、2015年度の医療的ケア児は全国に推計で約1万7千人。05年度の推計約9400人から10年間で約1・8倍に増えた。